

山田耕筰歌唱関西大学学歌音源の収蔵について

年史編纂室

平成二十五年（二〇一三）十一月、本学学歌を作曲した山田耕筰自らが歌う、関西大学学歌SPレコードのデジタル音源を年史資料として収蔵した。本稿では、音源収蔵までの経緯をまとめておく。

関西大学学歌の制定

大正十一年（一九二二）、関西大学は現在の千里山キャンパスへ移転し、大学令にもとづく大学へ昇格した。時の総理事兼学長であった山岡順太郎は「学理と実際の調和」「国際的精神の涵養」「外国語学習の必要」「体育奨励」の四つからなる「学の実化」の理念を提唱し、これからの関西大学が目指すべき指針を示した。

新たな時代を迎えた関西大学では、これまでの学歌に変えて、新時代にふさわしい学歌を求める声が上がった。そこで、本学教授服部嘉香が作詞し、服部と親しかった音楽界の偉才山田耕筰の作曲により、現在の関西大学学歌が誕生した。

山田耕筰の学歌歌唱指導

山田耕筰は学歌作曲後、二度にわたって学歌の歌唱指導を行っている。一度目は大正十二年（一九二三）二月二十二日のことで、大阪・神戸・京都での作品発表会のため来阪中であつた『東京朝日新聞』大正十二年二月十一日・二十三日付）山田耕筰を、宿泊していた今橋ホテ

ルに、宮島綱男専務理事、服部嘉香教授、音楽部の部員五名が訪ね、そこで部員が学歌の指導を受けたのである(写真1)。『千里山学報』(第八号、大正十二年四月発行)は、学歌指導の様子を次のように載せている。なお、山田は昭和五年(一九三〇)に耕筈と改名しているので、引用資料では耕作と記されている。

山田耕作氏の学歌指導

二月廿二日夕、宮島専務理事、服部教授及び本学音楽部員数名は、山田耕作氏を今橋ホテルに訪問した。氏は来着早々の多忙中を繰り合わせて一同と会見、長い鉄路の疲れも厭はず敬虔な態度で、本学学歌作曲の感想及び歌曲の詳細な説明をされた。氏は更に自らピアノに向ひ、各節毎に主唱伴奏の範を示して、親しく部員を指導せられた。好楽家の宮島理事、作曲家たる服部教授も、円熟せる氏の伴奏が語る豊かな芸術味と無上の感激に満たされて、今更の如く、氏の作曲により祝福された学歌を嘆美せられた。ここに山田氏に対し、当夜の御懇切な御薫陶を謝し、



写真1 今橋ホテルでの記念写真(『学報』第8号掲載)
右端宮島綱男、着席右山田耕筈、着席左服部嘉香

且つかかる大家の温容に接して、快い音楽の夕べを送る事の出来た幸福を特記し、同夜の写真と共に長く音楽部の記念としたい。

二度目は大正十二年（一九二三）十一月五日のことである。

本学では「学の実化」の理念を受けて、大学の講義では得られない実際的な知識を学ぶ場として、各界で活躍する著名人を講師として招き「学の実化」講座を定期的開催していた。その講師として山田耕筰が招かれ、講演後に本学学生に対して学歌指導を行った。『千里山学報』第十五号（大正十三年一月発行）の記事を載せておく。

山田耕作氏の来学と第十九回「学の実化」講演会
去る十一月五日、本学学生のために学歌指導の労を快諾せられた、山田耕作氏を迎へ、午前十時より千里山学舎第九号教室に於いて第十九回「学の実化」講演会を開いた。（中略）講演後同氏は引続き自ら

アノの前に座つて、約一時間半に亘り全学生のために、懇切且つ熱心に学歌を指導せられた。誠に快い音楽的気分富んだ氏の講演の後に、更にこの若しい元気に満ちた学歌の指導によつて所謂『力の音楽』を体得したのも少なくなかつたであらう。氏は更にこの意味に於ける音楽の具現として、本学にブラスバンドを作るべきことを慫慂せられ、その時には又能ふ限り助力を惜しまざる旨漏らされた。

学歌の録音

このような複数回の学歌指導を通じて、山田耕筰と関西大学との間でのやり取りが続くうち、山田耕筰自身が模範演奏をした関西大学学歌を録音してもらうことが企画されたと思われる。『千里山学報』第二十二号（大正十三年九月発行）に、次の記事が掲載されている。

本学学歌のレコード声写

本学学歌の作曲者山田耕作氏は、這般特別の好意を以て本学の請を容れ同学歌をレコードに声写された。

ここに同氏の懇情に対し深く謝意を表する次第である。因に該レコードは固より非売品ではあるが、極く少数の枚数を限り、希望に依り特に本学関係者に頒つことにしている。

レコードの録音と、そのレコードの頒布を知らせる記事である。『千里山学報』第二十三号（大正十三年十月発行）と『同』二十四号（大正十三年十一月発行）には、申込書が添付されている（写真2）。この申込書によれば、レコード表面は山田耕作が歌う関西大学学歌、裏面には本学学生有志が歌う学生歌を収録し、レコード一枚一円五十銭、送料四十銭で頒布されたことが分かる。このレコードがいつ録音されたのか、今のところ年史編纂室では確かな関係資料を見出すことができず、詳細は不明である。ただ、関西大学の日々の金銭出納を記した「日計簿」では、大正十三年（一九二四）七月三十日に「給与費 山田耕作謝礼」として二十円支払われたことが確認できる。これは、おそらく学歌録音の謝礼であり、この時までには録音が終わっていたと思われる。

また、学歌レコードのレーベル「ニットーレコード」は（写真3）、大阪市住吉区にあった日東蓄音機株式会社のもので、大阪で録音されたと考えるべきだろう。大正十三年（一九二四）の山田耕作の足取りを追うと、『東京朝日新聞』二月十四日付の記事には「山田耕作、作曲

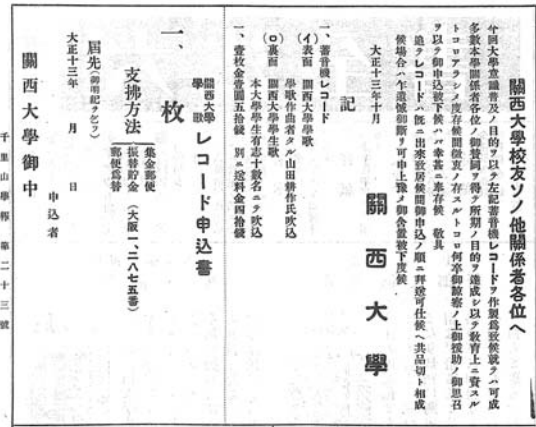


写真2 レコード申込書（『学報』第23号掲載）

家、関西方面の演奏旅行から帰京」、また『同』四月八日付の記事では「山田耕作氏、大毎主催音楽講演のため過半来、四国、九州、中国各地を巡歴、七日名古屋市の講演を終わつて八日帰京」とある。山田耕作は、何度か関西方面を訪ねているので、このような機会を利用して録音されたのだろう。



写真3 学歌レコード

レコード音源のデジタル化

『千里山学報』のわずかな記載から、山田耕作が歌う学歌のレコードが存在することは知られており、『関西大学百年史』でも取り上げてはいたが、本学には現物が残されていない、幻のレコードであった。

この幻のレコードを発掘されたのが、東京在住の加藤龍一氏である。加藤氏は中古レコード店で偶然にこのレコードを見出し、山田耕作本人が歌っているということで購入されたとのことである。購入後、加藤氏は山田耕作が歌う関西大学学歌に関する情報を得るためウェブで検索したところ、関西大学混声合唱団ひびきのOB会ブログにたどり着き、このレコードの存在を書き込まれた。年史編纂室では、ブログ管理人である吉川勲氏から、十月下旬、山田耕作が歌う学歌レコード收藏の有無の問い合わせを受け、初めて幻のレコードが姿を現したことを知ったのである。

その後、年史編纂室では所蔵者の加藤氏に、デジタル音源作製を依頼したところ、ご快諾いただいた。そこで、

十一月下旬に職員が東京へ出張して加藤氏からレコードを借用し、東京のスタジオでデジタル音源の作製を行った。取り出したデジタル音源は、さらにノイズ除去の作業を行ない、レコードを再生した状態で加工していない音源と、ノイズ除去を行った二つの音源を納めたCDを作製した。

今後の活用にむけて

今回、所蔵者である加藤龍一氏のご厚意により、山田耕筰歌唱学歌SPレコードのデジタル音源を作製し、年史編纂室で収蔵することができた。今後は、著作権にかかわる問題を解決したうえで、広く周知・公開する方法を考えたい。

伊藤信明（いとう のぶあき・年史編纂室）